

連載 （供覧） いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす
世界平和のための祭祀を復興させる

第三十二回 宗教の合理主義

南出喜久治（令和7年12月15日記す）

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち
（父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道）

宗教は、この循環論法には矛盾がないと強弁した「仮説」などを前提として成立し、それを合理主義で展開した理論体系であつて、そこから様々な徳目や戒律などを定めます。

神は、世界を作り、人を作つた絶対なるものとするのは、人の空想の産物です。人の空想の産物の神から人が作られたといふ循環論法は、宗教の致命的な矛盾です。

宗教と科学は異なる理論体系ですが、科学もまた宇宙の真理を絶対者とする一種の宗教です。実験を行ひ、再現性があれば真理と認めるのが科学であるとは言はれますが、本当にそれが正しいかは不明なのです。

アリストテレスの定説は、科学ではなく一種の宗教的体系です。アリストテレスの知見は一度も実験によつて得られたものではありません。

地動説のコペルニクスも、これに続くガリレオも、両者は宗教人です。「聖書は誤りを犯さないが、解釈する者は誤りを犯すこともある。」と言つて、「太陽はとどまり、月は動くのをやめた」（ヨシュア記 10 章 13 節）についての教会の解釈に迎合してガリレオは自らの地動説を否定するといふ変節をして命乞ひをし、「それでも地球は回つてゐる。」と愚痴をこぼしました。

しかし、いまでは、天動説も地動説も正しく、天動地動説が科学的な結論です。

いづれにしても、科学は宇宙の真理を絶対者とする点で宗教と似てゐます。宗教の場合は、循環論法といふ矛盾はあるものの、これを仮説として合理主義的に理論を組み立てることができます。理性の産物である宗教は、循環論法の立論が正しいと仮定することによつて、これに基づいた合理主義の体系として存在することになります。

根本的には非合理的なものですが、非合理を前提として、それを仮説として合理主義によつて組み立てられたのが宗教なので、その前提となる循環論法の非合理と虚偽を隠蔽し続ければ、宗教は合理主義の体系（計算の体系）として存在することができてゐるのです。

恵みといふ言葉は、草木が陽春の気に育まれて芽ぐむことから生まれたものです。恩と

いふ言葉は、恵みを受けたことへの感謝の意味であり、恩と恵とが一体となつて恩恵といふ言葉が使はれます。

祖先が自然の恩恵を受けて生業を維持したことについて感謝をし、その祖先が子孫を産み育てて繁栄してきたことについて感謝をして祭祀を行つてきました。そして、その子孫もまた祖先から命を受け継ぐことができたことについて、祖先と同じ恩恵を受け続けられることに感謝して祭祀を続けるのです。

ところが、宗教は、自然と祖先の恩恵を無視します。キリスト教やイスラム教は、人間が理性の働きで作り出した God を絶対神として、God によつて人間が作られたとする循環論法で、God への絶対服従を命じるために、自然は人と同じやうに God によつて作られたものとして崇拝の対象とせず、人によつて征服させる対象としますので、自然への崇拝を否定します。このことは祖先についても同じであり、崇拝の対象とすることを禁じます。

後述しますが、祖先の崇拝を判示するのは、モーセの十戒の「汝、父母を敬へ」の教へ矮小化ないし否定したものであり矛盾してゐます。

それどころか、祖先祭祀を否定することを誓約させ、異教徒との交流や異教の施設への立ち入り、儀式的参加などについても禁止するのです。このやうなことは仏教についても、同じ仏教の宗派であつても同じ対応を求めてゐます。

仏教の場合、父母、衆生、国王、三宝（仏法僧）の四恩を掲げますが、この中では、モーセの十戒の「汝、父母を敬へ」と同様に、父母に限定し、祖先を含めません。

そもそも、仏への感謝（恩恵）といふのは、循環論法の矛盾を基礎とした虚構の感謝なのです。しかも、親子、夫婦間の愛情を執着であるとして、これを「恩愛」として「恩恵」とは区別し、仏道修行の妨げになるものとして断ち切らなければならないものとしてゐます。